

※立川教会では、以下のようにクリスマスをお祝いいたします。
どうぞ、どなたでもお出で下さい。

☆クリスマス礼拝
12月22日(日) 午前10時30分～
☆クリスマスイブ燭火礼拝
12月24日(火) 午後7時～

12月第2週の礼拝説教

- 日 時：2024年12月8日(日) 10:30～11:30 待降節第2主日礼拝
- 説 教：保科けい子牧師
- 聖 書：新約：マタイによる福音書13章53～58節(新約P27)
- 説教題：「主イエスにつまずく人々」
- 讃美歌：18(「こころを高くあげよ!」)
231(「久しく待ちにし」)

今朝はアドベントクランツのろうそくが2本灯されました。週報にもありますように、本日は待降節の第2主日になります。4本のろうそくは、アドベントの4週の主日を現しており、ろうそくの減り具合によって主イエス・キリストの到来を待ち望んでいる時の長さを示しています。共に、主を待ち望むことに思いを深めてまいりたいと思います。

ところで、独り子である神が「人の子」として世にお生まれになり、どのような御言葉を語り、どのような御業をなさったのかということについては、新約聖書の4つの福音書がそれぞれの視点から記しています。福音書とは、当時の弟子たちが見聞きしたイエス・キリストの姿を、聖霊の導きによって教会の働きとして後代へと書き残した書物です。本日の箇所のマタイによる福音書13章53節から58節もまた、イエスという「まことの人間」としてお生まれになりお育ちになった方を、主イエスという「まことの神」として受け止めることができなかつた人々が存在した、ということを書き記しています。そのことによって、逆説的に、主イエスが確かに私たちの間に宿られたことを証しているということもできます。その様な意味で、待降節に読む聖書の箇所として選ばれているということができるかもしれません。

さて、54節からご一緒に見てまいりましょう。「故郷にお帰りになった。」とありますが、主イエスのお育ちになった故郷とはガリラヤ湖の西南の集落ナザレです。ナザレについては、ヨハネによる福音書に次のように記されています。イエスに出会って弟子となったフィリポがナタナエルに出会って、「わたしたちはモーセが律法に記し、預言者たちも書いている方に出会った。ナザレのイエスというお方だ」と言いました。ところが、それを聞いたナタナエルは、「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言った

のです。このことから、ナザレはその当時、それほど重要な町であるとは考えられていなかったことがうかがえます。ただし、ナタナエルはフィリポに連れられて主イエスのところに行き、主イエスと語らった後に、「ラビ、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です。」と告白し、弟子になったことが記されています。マタイによる福音書の本日の箇所に戻りますと、故郷の人々が主イエスに対してとった態度が描かれています。主イエスは故郷にお帰りになると、会堂で教え始めました。故郷の人々は、主イエスの言葉を聞いて非常に驚きますが、それはその内容に心を奪われたからではなく、「どうしてわれわれがその素性を知っているこの男が……」という驚きであったのです。54節から56節にかけて、人々の不審感を表す言葉が具体的に記されています。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。」。そのころにはすでに、主イエスがガリラヤの町々で奇跡を行い神の国の教えについて語っておられたことが、噂となって故郷にも届いていたようです。ですから彼らは、「あの大工の息子のイエスが弟子たちを集めて、あちらこちらで預言や奇跡を行っているらしい」「今度の安息日にはイエスが会堂で聖書の話をするようだ」と、人々は興味半分で会堂に集まってきたのです。そういうわけで、主イエスのお語りになった言葉も、最初から疑って聞いており、真剣に受け止めるはずがなかったのです。54節から56節にかけての疑いに満ちた言葉は、故郷の人々が主イエスにつまずいたということを明らかにしているのです。

マタイによる福音書で「つまずく」という動詞を主イエスとの直接的なかわりで用いている箇所が、このほかに、11章6節の「わたしにつまずかない人は幸いである。」、十字架の出来事の直前である26章31節の主イエスの言葉「今夜、あなたがたは皆わたしにつまずく。」と、33節のペトロの言葉「たとえ、みんながあなたにつまずいても、わたしは決してつまずきません。」などがあります。本日の聖書箇所であるマタイによる福音書の13章57節「このように、人々はイエスにつまずいた。」も含めて、いずれの場合にも主イエスに出会うということは、主イエスを受け入れて信じるか、拒んで背を向けるかの決断を迫られることだ、とマタイによる福音書の著者は考えていると思います。それは、今の私たちにも当てはまります。主イエスの御言葉と御業を受け入れて救われることも、それらを拒むことも、私たちにはできるのです。本日の箇所は、58節の「人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。」と結ばれています。主イエスはご自分の言葉と行いに現れている神の業を信じようとしないう郷の人びとを後にして、そこを去って行かれたのです。では、私たちは果たしてつまずいていないでしょうか。そのことを、私たち一人一人が待降節には問われているような思いがいたします。

昨日、たまたま、見ていたテレビ画面から、ヘンデルの話が流れてきました。そして、「メサイア」の楽譜を手にしたヘンデルの彫像が映し出されたり、ハレルヤコーラスが聞こえてきたりしました。今は、そういうシーズンだったのだと思いながら、主イエスがお生まれになったのは、決して美しい音楽やまばゆい光があふれる豊かさの中ではなかったことを改めて考えさせられました。ナザレの人々が「この人は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。」と自分たちの日常生活の延長上でしか主イエスを受け止めることができなかつたことと、今の私たちが日常生活を瞬間的に忘れさせてくれる美しい音楽やきらびやかな風景の中に主イエスの誕生を位置づけることというのは、実は主イエスのご降誕という出来事の裏表かもしれない、と考えさせられました。それらは時として、私たちをつまづかせるものとなっていくことを忘れてはならない、とも思わせられました。そして、キリスト教の究極的なつまづきは、ハレルヤコーラスなどでどれほど力強く美しく歌いあげられているとしても、主イエスの十字架と復活の出来事です。けれども同時に、キリスト教の本当の救いとは、私たちが置かれている現実の中で何度も何度も主イエスの御業や御言葉につまづきながら、そこから主なる神様の憐れみによって立ち上がらせていただくことができるということにあることを、今年の待降節にはしっかりと覚えることにいたしましょう。